

研究発表

宋代天台における六即説の展開——六即と理事兩種三千の對應關係をめぐって—— 久保田正宏

知禮没後の六即に關する思想展開を見ると、湛然述『止觀大意』の「理同故即、事異故六。」という一文と理事兩種の三千を矛盾なく對應させることが、この時代の學匠にとって大きな課題であったことがわかる。南宋時代の初め頃には、了然（一〇七六—一一四一）述『大乘止觀法門宗圓記』に、この問題に對する見解が示される。そして、南宋時代の宗印（一一四八—一二二三）をはじめとする學匠は、知禮や仁岳の教説に独自の解釋と批判を加えることになる。本発表では、このような六即と三千の對應關係をめぐる問題に検討を加えたい。

智儼撰『金剛般若經略疏』の思想的位置づけについて

櫻井 唯

中國華嚴宗の智儼（六〇二—六六八）撰と伝えられる『金剛般若經略疏』は、三種般若思想を用いて菩提流支譯『金剛般若經』を解釋する文獻である。三種般若とは、智慧を實相・觀照・文字の三相から説明しようとするものであり、智儼はこれを「解心」と「行事」という二つの立場から論じている。本発表では、『金剛般若經略疏』の思想内容を解明し、智儼の他の著作と比較することで、その撰述の意圖および思想形成上における意義について検討したい。

張湛『列子注』の覺夢と神人

富田 繪美

『列子』に注を付した東晉の張湛に關して、これまでの研究では、氣の集散によって有無が相對化する物質世界と、有無の根源であり有無を超越した「至虛」の世界とに、萬象を二分して解釋した點に、その思想の獨自性が指摘されてきた。本発表では、張湛が『列子』に記されている神人について、有無の相對性を超越し、「至虛」の中に存在する者と位置づけ、神人に關する記述をすべて寓言として捉えていたことを明らかにし、東晉における玄學と神仙思想との關係を考察する。

修養論に見る明清期思想轉換の一樣相

——「改過」説と「愼習」説に即して——

原信太郎アレシヤンドレ

すでに指摘されているように、明代後期、「改過」が修養論上のテーマとして取り上げられる機會が増え、民間の功過格運動とも呼應してある種のムーブメントを形成した。劉宗周もかかる潮流に身を投じた一人であって、その方法論は『人譜』として結晶している。清代に入ると、劉氏門下の陳確や黃宗羲らにより、「改過」に代わって「愼習」が強調され始め、それがさらに繼承されていく。本発表はかかる思想史的展開の内實をつぶさに検討し、宋明理學が清代儒教に轉換する一樣相を修養論上の變化から照射する試みである。

アーラヤ識説導入と禪定の體驗との關係について

山部 能宜

一九八七年にシュミットハウゼンは、インド瑜伽行學派でアーラヤ識説が導入された理由を検討する詳細なモノグラフを發表し、アーラヤ識説は『法施比丘尼經』の滅盡定の記述における「識が身體を離れることはない」という一文の解釋をめぐって導入されたものであったという假説を提示している。つまり、アーラヤ識の導入を不可避にしたのは聖典解釋上の問題であって、直接何らかの體驗に基づいたものではなかったと主張するのである。私はこの研究を踏まえつつ關係の文獻を再検討し、アーラヤ識が禪定中の體驗により直接的に依據していた可能性を提示してみたい。

講演

『老子』の形而上學と「自然」——北京大學簡に基づいて——

池田 知久

二〇一二年二月の北京大學藏西漢竹書『老子』の公表は、再び我々に『老子』の文獻や思想についての新たな關心を呼び起こした。本講演では、北京大學簡を主な資料として、戰國時代から六朝時代までの「自然」思想史を構想し背景に置きながら、『老子』の形而上學と「自然」思想との絡み合い（矛盾と調和）を論じてみたい。本論に入るに先だって、近代日本における『老子』研究の先達とされる武内義雄と津田左右吉の研究方法を、今日の立場から『老子』の本文校訂と思想理解の両面にわたって吟味しておく。